IFCCレター

改題NO-90（通算 104 号）2024 年 1 月

ＩＦＣＣ国際友好文化センター
東京都新宿区山吹町 316 番地
菊地ハイツ 101
ＴＥＬ０３-３２６８-４３８７
ＦＡＸ０３-３２６８-６０７９
Email:jvccpf@rmail.plala.or.jp

新年にあたり、皆様のご協賛ご協力に謹んで感謝申し上げます。

IFCCは活動開始して37年目を迎えることになりました。コロナ明けとはいえ、それは基準を変えただけで実態は変わりなく重く横たわっていました。

2022 年のウクライナ戦争がはじまってから、「対岸の火事」よろしく、ウクライナ国民支援が叫ばれてきましたが、わたし（鎌田）は違和感を持っていました。この気持ちは私だけではなかったようで、≪今回はどうして「ベトナムに平和・市民連合」（通称：ベ平連）のような市民運動になっていかないのか≫と疑念を発する識者がいました。全く同感でした。「どうして戦争を煽り、相手を負かす≒殺す後押しする」がごときことが喧伝されるのか。そのため、資金まで出そうという「市民」（カッコつき）たち、自称・革新派、自称・平和運動家、自称・良心派たち。「平和のために戦争する」ことに翼賛していく様相。

地元で長年続いている「原爆の図展」で、今回は≪児童ハガキ平和アート・メッセージ展≫が行われましたが、そこには**≪平和のために、どうして戦争するのですか≫**と小学生のメッセージがありました。

これに答えられていないことに、我々側のとつの≪終焉≫をみました。

2022年４月、ウクライナ戦争停戦寸前で御破算さんになった顛末は、今ではよく知れ渡ったいますが、戦争継続を望み「利」とする勢力が存在したことにあります。「平和のための停戦」運動こそが、唯一の道だったにもかかわらず、ロシアが退却したら平和が訪れるような誤認識が拡散されてしまいました。無責任なことに東部三州の内戦とその発端・現状には触れずにです。

パスレスチナ・ガザ戦争でイスラエル政権の暴虐に対する世界の抗議について、日本の自称・平和勢力の方々はどのような「落とし前」をつけるのかナ？と、自らに課題を課しています。

このように 2023 年のこれらの運動の表層は、一つの「終焉」を示すものでした。そして、累々と闘い築いてきた我々側の橋頭保がいとも簡単に崩される脆さを思い知らされました。

≪開始≫のためのモノを模索していますが、少なくとも「主義」ではなくそれは≪生存と生きとし生けるものの尊厳≫が価値の根底にあるべきと思っています。新年にあたり皆様のご教授をお待ちします。（鎌田）

令和 6 年能登半島地震で被災の皆様にお見舞いを申しあげます。IFCC と友好関係のある各国の友人たちからお見舞いと励ましが届いています。紙上を借りて共にあることをお伝えいたします。

追悼　IFCC 会長・又市征治さんを偲ぶ

2023 年 9 月 18 日、又市征治さんが永眠されました。79 歳。2019 年の参議院選挙に立候補せず政界から引退されたあとは体調がすぐれず、近年は闘病の日々でした。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

2023 年 12 月 16 日、東京で、政界、労働界、平和護憲運動関係者など生前の又市さんを偲ぶ方々が参集され、「又市征治さんお別れの会」「又市征治さんを語る会」が執り行われました。

IFCC の 1988 年発足時の会長・高沢寅男さんのご逝去を受け、1999 年から IFCC 会長に就いていただいてきました。当時は自治労富山県本部委員長でしたが、その後 2001 年の参議院選挙で当選し 2019 年まで 18 年間参議院議員を務められました。

※2 頁に続く

枯葉剤爆弾被害者支援チャリティーコンサート

上：枯葉剤爆弾被疑者支援コンサートは多くの参加者で盛り上がった（東京公演）
左：演奏者たちの熱演が会場を虜にした。（神戸公演）

●IFCC 国際友好文化センターは

・2022 年に引き続き 26 年数を数える**ベトナム戦争枯葉剤爆弾被害者支援のためのベトナムアンサンブルチャリティーコンサート**を開催してきました。これは**日越外交関係樹立 50 周年事業認定**（日本国外務省）も得ました。20123 年 10 月 17 日～22 日、神戸市、東京北区、東松山市、北上市で都合 5 回のコンサート、1 回の文化交流を行い、会場では多くの感動を呼ぶコンサートとなりました。収支報告は、会報次号で報告いたします。

枯葉剤被害の現状と実相がウクライナ戦争、パレスチナ・ガザ戦争によって関心を引いたことは皮肉な面もありますが、戦争犯罪が人間の存在と尊厳を破壊することを、立ち止まることなく広報し続けたいと思います。

●日本キューバ連帯委員会（CUBAPON）は

・2023 年 11 月 29 日～12 月 7 日、懸案の**訪問団がやっと実現**し、2019 年以来 4 年ぶりの訪問団で 23 回目となりました。今回は米国による制裁強化はキューバへの渡航にも及び、厳しい条件にさらされました。

まず、従来のカナダ経由フライトがなくなったこと、米国経由の場合従来のEASTに加えキューバ渡航者には米国査証取得を受験としてきたこと、その査証も旅行者は対象外であること、等で渡航フライトは限られメキシコ経由選択となりました。次は、キューバ国内の経済的社会的疲弊状況が想像以上で交通網はマヒ状態に等しく、スケジュールはあってないようなものでした。連帯の旗は掲げ続けるとしても、今後の交流活動の在り方は検討が必要になっています。

・今のキューバを体験し見聞してきた訪問団のレポート**『経済封鎖下のカルブの社会主義ＸＸⅡ号』（2024 年 3 月）が発行**される予定です。まさに渦中のキューバをレポートしたものになります。お買い求め下さい。

●NPO 日本ベトナム平和友好連絡会議（JVPF）は

・2023 年、ベトナム北部・ハザン省で**日越友好植林事業を開始**され、第一期 1 年目の事業（5ha、10,000 本、スターアニス）を終えました。

・北部ハザン省の少数民族寄宿中学校で 2023 年 1 月 40 人に**奨学金支援**が実施され、その際の要望を受け、香川HVPF はソーラー電卓 70 台を寄贈しました。引き続き、2024 年 1 月に訪問団による奨学金贈呈が計画されています。

・また南部ラムドン省の少数民族寄宿高校で最後の 10 人に奨学金支援（300,000 円　鹿児島 JVPF 主宰）が終了するにあたり、鹿児島 JVPF は記念訪問団を 2023 年 5 月派遣し、ソーラー温水器シャワー設備を寄贈してきました。

鹿児島 JVPF はラムドン省でのプロジェクト終了を受け、北部バクザン省で奨学金支援事業を計画。JVPF 中央と共同で進める予定。

・ハザン省では、ヴイスエン郡公立中学校でで、少数民族出身学生への報奨金支援が 2023 年度から開始され、1 年目の寄贈が 2024 年 1 月の訪問団によって行われる予定。

・ハザン省で続けられている**枯葉剤爆弾被害貧困家庭支援『仁愛の家』寄贈活動**はベトナムアンサンブル・チャリティーコンサートによる基金が目標通り創ることができませんでしたが、労働組合・連合の「愛のカンパ」助成を受け 1 軒の家庭に 2024 年 1 月に届ける予定です。

※1ｐ「追悼」より続く

IFCC の活動の根を張り、中国、ベトナム、キューバなどへと活動分野を広げられてきたのは、IFCC 会長としてかつての DDR（東ドイツ）との交流経験豊富な又市征治さんの助言、尽力をいただいてきたからでした。

12 月 16 日の「会」では政界、労働界での華々しい活動やそれにまつわるエピソードが多く披露されましたが、IIFCC のような市井の活動に心寄せていただいたことも忘れられません。特に、ドイツには東西統一後も心を寄せておられました。

キューバと又市さん　CUBAPON がキューバの日系人が多く住む青年の島で実施した「稲作支援プロジェクト（2009-2015）」の事業地視察のため現地を訪れ、日系人会の皆さんを激励する又市さん。又市さんは CUBAPON 共同代表委員（中央に立つのが又市さん、2010 年 11 月 22 日、青年の島で）

忘れられない、参議院での又市さん

2019 年3月19日参議院・政府開発援助等に関する特別委員会で**ベネズエラ**の問題を取り上げ、当時の外務省及び河野外務大臣にたいして迫ったことです。それはベネズエラの混乱と危機にたいする日本政府のも役割を指摘するものでした。

≪ベネズエラ情勢と日本の役割についてちょっと伺ってまいりたいと思います。 最近のベネズエラの政治経済状況は大変混迷を深めて、日本との関係も微妙になっている、こんなふうに見受けられるところです。≫と指摘したうえで≪やっぱり見落としてならぬのは、アメリカの経済制裁が大きい、こう見るべきではないかと思います。≫

米国が傀儡として作ったグアイド暫定大統領とマドゥーロ政権の間で右往左往する日本政府に、≪問題は、アメリカの軍事介入が秒読み段階というふうにも言われるこの緊迫した情勢の下、状態の下で、必要なことは、誰を支持するのか、あるいは誰を批判をするのかではなくて、今申し上げたように冷静な話合いの雰囲気をつくり上げていく、このことにどういう努力をするかということだろうと思う。独裁か民主主義かといった対峙が問題なのではなくて、両者の歩み寄りをどう強く求めていくかということが今求められているのではないかということだと思うわけです≫と迫りました。

このことを特筆するのは、当時、日本のマスコミ、日本共産党含めた政党・政治家の大半がマドゥーロ政権批判・避難の大合唱で、また国会で誰一人取りあげることのないなかでしたので、又市征治という人の「人となり」を如実にしましたことだからです。

※この発言は駐日ベネズエラ大使館の依頼を受けたものではなく後日、駐日ベネズエラ大使館は又市征治さんに謝辞が届けられました。